

「死んだラザロを遣わしてください」

2015年10月17日

ルカによる福音書 16章 26節～31節。「『そればかりか、わたしたちとお前たちの間には大きな淵があって、ここからお前たちの方へ渡ろうとしてもできないし、そこからわたしたちの方に越えて来ることもできない。』金持ちは言った。『父よ、ではお願いします。わたしの父親の家にラザロを遣わしてください。わたしには兄弟が五人います。あの者たちまで、こんな苦しい場所に来ることのないように、よく言い聞かせてください。』しかし、アブラハムは言った。『お前の兄弟たちにはモーセと預言者がいる。彼らに耳を傾けるがよい。』金持ちは言った。『いいえ、父アブラハムよ、もし、死んだ者の中からだれかが兄弟のところに行ってやれば、悔い改めるでしょう。』アブラハムは言った。『もし、モーセと預言者に耳を傾けないのなら、たとえ死者の中から生き返る者があっても、その言うことを聞き入れはしないだろう。』」

主イエスは「金持ちとラザロ」の譬え話をされた。ラザロは金持ちの門前で悲惨な生活をするしかなかった。金持ちは豪華な生活を満喫していた。二人は死んだが、ラザロは天の宴席でアブラハムの傍に迎えられた。一方の金持ちは永遠の炎で焼かれる陰府に落とされた。彼は、天のラザロをはるかに見上げ、アブラハムにラザロの指先を水で浸し、舌を冷やしてほしいと助けを求めた。アブラハムは、お前はよいものをもらっていたが、ラザロは悪いものをもらっていた。しかし今は、彼は慰められ、お前はもたえ苦しむのだと拒絶された。両者を天と陰府に峻別した理由は、隣人の苦悩に目を閉ざした金持ちの無関心の罪を、主イエスは示されたのであろう。信仰とは、他者への関心と愛である。

続いてなされる天のアブラハムと陰府で苦しむ金持ちの対話は興味深い。

アブラハム：「そればかりか、わたしたちとお前たちの間には大きな淵があって、ここからお前たちの方へ渡ろうとしてもできないし、そこからわたしたちの方に越えて来ることもできない。」

金持ち：「父よ、ではお願いします。わたしの父親の家にラザロを遣わしてください。わたしには兄弟が五人います。あの者たちまで、こんな苦しい場所に来ることのないように、よく言い聞かせてください。」

アブラハム：「お前の兄弟たちにはモーセと預言者がいる。彼らに耳を傾けるがよい。」

金持ち：「いいえ、父アブラハムよ、もし、死んだ者の中からだれかが兄弟のところに行ってやれば、悔い改めるでしょう。」

アブラハム：「もし、モーセと預言者に耳を傾けないのなら、たとえ死者の中から生き返る者があっても、その言うことを聞き入れはしないだろう。」

この会話はもちろん、イスラエルの宗教的伝統を背景にしている。天と地と陰府の三層構造で、陰府には業火の燃える地獄もあるらしい。天と地獄の間には越えられない淵がある。死んだラザロを遣わさなくても、モーセと預言者（聖書）を読めば、人はどう生きるべきかを知ることができる。たとえ、死者から生き返った者を遣わしても、彼らは聞く耳は持っていないだろうと、手厳しく不信仰を指摘している。しかし、古代教会で成立した使徒信条のキリスト告白として「十字架につけられ、死にて葬られ、陰府に降り」とある。聖書にはない言葉であるが、主イエスは陰府にまで降り、そこに居る全ての人々を贖い、救ってくださったと告白している。この告白が真実である。